

瑞岩寺報

2013.01.01
(平成25年 睦月)

【正月号】

お正月総合案内

お正月ご祈禱法要

お正月は毎日、天地が招福除災を祈念する大般若ご祈禱を勤行します。
お正月は前年の悪を反省し、新たな年の誓いを立てる、年初めにふさわしい行事です。

ご祈禱は左記の通り行われます。

厄年厄除・病氣平癒・交通安全・良縁成就・開運厄除・家内安全・無事成就・商売繁盛・学業成就・試験合格などのご祈禱のお申し込みは同封の申込書をお寺まで持参されるか、ファックス(37-5535)してください。

【期 日】 1月元旦(火)

1月2日(水)

1月3日(木)

【時 間】

午後10時～午後2時頃の2回

◎その他の時間でもご祈禱可能です。

【ご祈禱料】

ご祈禱紙札(小) 3,000円
ご祈禱木札(中) 5,000円
ご祈禱木札(大) 10,000円

【お願い】

- 一、お願い毎は二つまでにしてください。
- 一、ご祈禱札にはお守りがつきます。
- 一、法要後、ご祈禱札をお持ちください。
- 一、法要にはなるべく本人がご参加ください。
- 一、希望の方には郵送しますので申し付けください。

年始参詣

【期 日】 1月元旦～3日

【時 間】 午前7時頃～午後5時まで
※年始参詣にお寺にお参りに来られませんでしたすべてのお檀家さまにはすばらしい瑞岩寺カレンダーをお渡し、祝茶を差し上げます。是非、皆様お揃いで気軽にお出かけ下さい。



お墓そうじ 瑞岩寺にお墓のある方へのご案内です

【期 日】 12月23日(日)

【時 間】 午前7時から

お正月が近づいてきました。お墓のお掃除をしましょう。この暮のうちに仏壇をきれいにしてお鏡餅を供え、お花を飾り準備を整え、元旦早朝、若水を汲み供え、一家そろって仏壇に手を合わせ、よき新年をお迎えになることは、私たちの善行の始まりだと思います。さらに、お寺に参拝してご先祖様に感謝の誓いを祈ることこそ意義深い初詣になると思います。一斉お墓掃除を右記のごとく行います。たまには早起きしてお墓掃除も気持ちいいものです。お子さんやお孫さんといっしょにどうぞ。

厄年早見表

◇からだの変わり目◇

	後 厄	本 厄	前 厄
男の大厄	42歳 昭和46年	47年 昭和47年	48年 昭和48年
女の小厄	37歳 昭和51年	52年 昭和52年	53年 昭和53年
女の大厄	33歳 昭和55年	56年 昭和56年	57年 昭和57年
男25歳の厄年	昭和63年	平成元年	平成2年
女19歳の厄年	平成6年	平成7年	平成8年
幼児4歳の厄年	平成21年	平成22年	平成23年
男女61歳の厄年	昭和26年	昭和27年	昭和28年
13歳詣り	平成13年 男女		

Attention!

以下の点に留意ください。

「お祈禱法要について」

お祈禱札について、申込書を持参、またはファックスしてください。
※ご祈禱料の振込用紙を同封します。
市内・県内外の方は同封の振込用紙をお使いください。
※ホームページからダウンロードできます。

- ◆ 強制ではありません。また、上記以外の日や時間も受け付けております。
- ◆ 自分のお墓の掃除が終わったら、通路など共有の場所のお掃除も積極的にお願ひします。
- ◆ 遠方の方はお寺でやっておきますのでご安心ください。
- ◆ 飲み物はお寺で用意してあります。

緩和ケア診療所・いつぱ

萬田緑平さん

インタビュアー

(副) 本日はインタビュアーにに応じて

いただきました誠にありがとうございます。先日はラジオFM太郎の特別ゲストにお越しいただき誠にありがとうございます。今一度、お伺いしたいのですが、萬田先生が外科医をされた理由をわざわざお辞めになって、こちらの医師として働くようになった理由をお聞かせください。

(萬田) 僕は医者になったときに、医者は患者に告知をしないで「ガンバレ！ガンバレ！」とただ言うだけで患者も一緒に頑張る。本人が家族と何にも話せず意識がなくなっても、人口呼吸器をつけ強心剤・昇圧剤を打たれ、心臓マッサージをされながら亡くなっていくんですね。

僕は、一年目の医者だったけれども、そんなのおかしいと思いました。亡くなる運命にあるのに、何も話せないで、「ガンバレ！ガンバレ！」と延命してくるのは、延命される患者は辛いと思います。心臓マッサージをしていてなんでこんな亡くなり方をしなくてはいけないのだろうかと思っていま

た。

その時から、いろんなことをやり出していきました。例えば、新人の医者だけでも、周りに内緒で家族に「心臓マッサージはね。これこれこんな意味なんですよ。だから、ここで止めるという手もあるんですよ。」と裏で教えていた。ずっと、本当のことを話せないで「サヨナラ」もちろん言えないし、「ありがとう」も言えない。「ガンバツテ」としか言えない家族に「本音で話してみたら？」とそういう話しを自分の担当じゃない患者の家族にも裏でちょこちょこ話していたんです。(笑)

で、次第に手応えというか、つかめてきたんです。厳かに「ご臨終です」と家族に伝えているその横で、「うまく行ったね！」って家族にVサインして目でコンタクトしたりしていたんです。

「あっーちゃんと言えば分かるんだ！」「心臓マッサージをしなくて済んだよ」「上手く私たちがやったよ」「ちゃんと泣かずに行ってらっしゃい

と見送れたよ」とちゃんと話せばできるんだと。

「きつと、告知からすればもつとちゃんと亡くなることができるんじゃないか？」と思ったんです。

僕は別に医者になりたいと思ったわけではなくて、カッコイイ外科医に憧れていて、ずっとそれだけやって来ただけです。だけど、自分の時間を余計に使って陰でやっていました。

2、3年前に講演やっていたときに、私が午前の講演だったんですが、午後の講演者が私に向かって「萬田先生！お久しぶりです。私萬田先生に会いたかったんです！」と突然言われたんです。どういうことかという

その方のお父さまが僕のところの大病院の外科で亡くなるときに、とにかく辛そうだった。どうしていいのかわからなかった。でも担当医じゃやない萬田先生をおじいちゃんが大好きだったんです。」と言ってくれたんです。

僕は自分の担当じゃない患者さんにも声をかけていたんですね。だから、おじいちゃんが好きだった萬田先生に最後の看取りの直前に「先生、お願いします」と言われたんです。それも、僕は担当じゃない。受け持ちじゃない。新人医師を看護室から呼び出して、「私たちはどうしたらいいんですか？

お父さんにどう接したらいいんですか？」って聞くんです。そして僕が、「行かないで」じゃなくて「行つてらっしゃい」のような。「さよなら」じゃないけど、「行かないで」という送り方はしないで、きちんと死なせてあげて下さい。」って言ったそうです。それがきっかけで、私はちゃんと見送ることができました。というんですね。

それがきっかけで、今介護の方を指導するというこの職についています。萬田先生がきっかけなんですと言われて、「エッ？」そんな事忘れていたけれど、そんな影響を僕が及ぼしていると知ったんです。

自分のルーツは、どこにあるのか？と考えているのですが、僕は受験も医学部一本だっただけで、ずっと医者になりました。自分にはなくて、浪人時代に自分が「人が好きだ」ということに気がつきまして、

じゃ、人を相手にする仕事だったら学校の先生か、医者だろうと思った訳なんです。

それまで、ずっと理工学部で、研究者とかになるんじゃないかなと思っていました。でも、僕は物相手じゃなくて、人相手がいいと。

そして、医学部受験して、人助けをしたいからじゃなくて、人が好きだから医者になった口なんです。



(副) 先生がおっしゃる「人が好き」

でも、人が好きなんです。それは、ずっと続いていることなんです。大きな病院の外科部長をめざしていたんですけれども、、、

患者から離れてまで外科医であり続けることに魅力的に感じなくなってきました。現場からも離れ、経営の方に回っちゃうし、「外科部長を目指すのは、ダメだわ」って思ってたのが医者になって10年目頃だったんです。

カッコイイ外科医になりたかったんだけど、早めに違う道に進もうと。いわゆるホスピスとか、きちんと亡くなる人を看てあげる仕事をしようとして、外科で十分仕事をするのができたので。やることはすべてやったので。

というのは、先生のころの深い所、その本当の理由はどこにあるとお考えでしょうか？

(萬田) 実は、自分でも気がつかなかったです。浪人したときに、親友とじっくり話したときに、僕はこういう人だなと分かったんです。バカにしていたサッカー部のダメダメ君に気づかせてもらったんです。

ダメダメ君じゃなくて、僕の人生を変えてくれた大の恩人なんです。彼と話していたときに、じっくり話すということをお教わって初めて気がついた。(涙)

(副) 先生自身が「終末医療で、こっちの方が幸せな死に方じゃないか？」と思っても多くの病院がそっちの方向に向かない理由はどこにあるとお考えですか？

(萬田) その辺の「ひずみ」の理由は、延命治療って悪いって言うけれど、医者はもともと人の病気を治すのが仕事だから、「もうダメだから諦めましょう」と言うよりも「まだ、チャンスがあります」と言う医者じゃないとダメだと思います。

僕も以前は医者が悪いと思っていたんです。でも、そんなの無理だと考え直しました。「ガンバレ！ガンバレ！」と今まで言っていたところから、「諦めよう」と変えることはすごく難しいんですよ。自分で判断しなきゃいけないわけですから。

逆に病院に行って、「治してください」という患者に「諦めなさい」と言われてしまったら寂しいじゃないですか？

いわゆる医療の延命治療が悪いのではなくて、患者と家族がいけないじゃないかと気がついたんです。そして、次第に分かってきたのは、本人の意思じゃなくて、家族の意思が大切なんだと。家族の影響力が大きいのだと。

「本人は気の弱い人だから、本当のことを言ったら悪くなるから言わないで下さい。」って言います。みんな弱い人だから言ったら、ここにズキンと来るに決まっています。

だから、それを「可哀想だから言わないで下さい」と言っても、実は患者がキツイ状態になった時に初めて気がつく。

「あなたは落第ですけど、もう少し勉強させてあげて下さい」と言っても、落第してから気がついて、今まで受かると信じて勉強したのに分かってきたのなら、もっと早く教えてくれれば、もっと遊べたのに！もっと遊ばせて欲しかった！もう、遊べないじゃないの！」というのと同じです。

本人に本当のことを言わないで、「諦めたら可哀想だ。医者が諦めても、私たちは諦めるわけにはいかない」と言って、次の治療を探していく。

結局、それが「延命治療」なんです。「病院に入れて治してください」と言う。「まだ、治るはずなんです。平均寿命よりも前なんです！」と。

その辺が、まず本人の意思じゃなくて、家族の希望がすべて働いているので、本人に本当のことを伝えられないですね。医者も伝えたいけれども、家族が伝えないで下さいという。

僕はそう言われても、なんとか家族に「本人に本当のことを言ったほうがいいですよ。」とやってきましたけど、普通の医者はそんな時間は面倒くさい勿体ないから、自分の食べるためと、収益をあげるために頑張らなくてはいけません。

そんな時間を作って患者と接していたら、自分のポジションが上がっていかないんです。

今は、医者だから安泰じゃなくて、医者の世界もすごく競争が激しいんです。だから、自分のポジションを伸ばしていくためには、そんなに患者さんのことに構ってはいられないわけです。

でも、本当に患者さんの立場に立ってみれば、①本当のことを話してくれること。もう1つは、長谷川さんの分野ですね。②亡くなることを受け入れること。

もう、2人に1人がガンになる時代なんです。どんな人でもいつかは亡く

なるのです。平均寿命よりも早く半分の方が亡くなるんです。でも、早く亡くなると、「可哀想だ。」とそんなことを言われる。

いわゆる、「死の準備」をしていない人たちは、絶対足掻くから、さらに辛く苦しくなります。準備している人は辛そうじゃないです。

僕らが薬で辛さを軽減するんじゃないやなくて、本当に「死」というものがあるを受け入れている人たち、自分の宗教を持っていて人たちは、ちゃんと頭と身体と心が一致していて「死は仕方ないこと」と思っています。

そうやって経験している人たちや、準備している人たちは、薬をそれほど使わなくてもいいんです。

やっぱり、経験していない人たちは、辛さから逃げる。逃げればもっと怖くなる。そんな仕組みだと思いません。経験とは、準備とか覚悟がなければ辛い。そういう状況だから、家族もつい「ガンバレ！」と言ってしまふ。

津波が50年に一度でも、準備している人は怖い思いをしない。死ぬのは100%あるのに準備していないから、こんなに早いとは思わなかったと言うけれど、みんなあり得る話なんですよ。そういうところが、延命治療につながって、それがまた辛さを生む。

延命治療を知っていて、本人が本当

のことを知っていれば、大抵の人は延命治療を望まないから、辛くはないです。

「緩和ケア」が流行るとか、流行らないとか、たぶん薬の「緩和ケア」だけだったら病院の人のほいほいいいけれど、でも痛みが取れても、死にたくないという思いがあれば、どんなに治療をしても、緩和ケアをうけても苦しみを先延ばしにするだけで、そういう死に方は結局は辛いと思う。

「緩和ケア」が大事なんじゃないかと、「宗教」とか「逃げない」とか

「仕方ないもんだ」と家族が思うこと。そうすれば薬なんてあまり薬使わないですよ。酸素も、「苦しい」って言わないから。

(副) 宗教をもっている人たちというのは、今宗教離れといわれる現代で、どこら辺の宗教なんでしょう？

(萬田) 明らかに宗教を持っている人は、辛くなさそうです。僕は以前は新興宗教をバカにしていました。何やってるんだらうと、だけど、いわゆるキリスト教や新興宗教の信者さんたちは、明らかに薬の量が減っているし、



延命治療をしないし望まない。死というものをすでに受け入れているんです。

既成宗教の信者さんたちには、そういう方が少ないですね。今、お一人一族の方の所に行っていますが、その方は当然「死を受け入れています」。お寺で葬式を何度も見聞きしていますから。

どんな新興宗教でも自分たちで信じてるものがあれば、辛そうじゃない。だから僕自身も大分考え方が変わりました。

(副) 日常生活の中に宗教というものが深く入り込んでいるんですね。

(萬田) 逆に普通の仏教徒の中に「死」が受け止められていないことが驚きでした。

1度、患者さんの自宅の2階に上げられて祭壇を見せられたことがありました。新興宗教なんですけど、すごいと思いました。でも、そこに通されたことがとても嬉しかったですね。「萬田先生には、話しておこう」という気持ちで嬉しかった。カッコ悪いとか、そう思っていたんでしょね。

「ああ、俺もそう思われる人間なんだな。」って、逆に嬉しかった。以前は、「実は私△△教です。」と言ってくれなかったと思うんですけど、今の

僕ならば、「実は〇〇教です」と言ってくれると思うんです。僕にそういう雰囲気出て来たのかなあと思っています。

(副) 既成宗教と新興宗教の一番の違いは、「その宗教を自分で選択しているかいないか」だと思のですが、お葬式と法事を最後の砦として重要視しすぎて、生前の人々の信仰という部分が足りなくなっているのかも知れません。

宜しければ、萬田先生の将来的ビジョンのようなものがあれば、教えてください。

(萬田) それはもう、亡くなるのが恐ろしくなくて、ちゃんと家で死にたい人は家で死ぬ。「いやだ〜」と言って病院で死んでいく人がいなくて済むのは1つと、あと1つは、生まれるときに「ありがとう」なら、死ぬときも一番いい場面で「ありがとう」「おとうさん、おかあさんありがとう」と言う場面があるんですよ。みんなそうなるはずだと僕は思っているんで、亡くなるのが「そんなのイヤ」じゃなくて、そこも通らないといけないところだけ、人生を振り返って「ありがとう」と感謝を伝えられたり、それを見てお互いに良かったね。お互いに家族が一致団結したり、いろんないい事があったりして、「HAPPY END」という言葉があるけど、亡くなるのが一番しつくりくると。ドラマや舞台の最終回よりも、本当の人生の最終回、最初と最後がいいと、これ

は可能なんじゃなくて、もともとそうなんじゃないかなって思うんですよ。それをいつまでも亡くなることから逃げていたらもったいない。

これは可能だと。そういう世の中にすることは可能だと。だから、講演活動して、悲しいものから大事な楽しい思い出だったり、そういった家族はちゃんとお別れできて、想いを伝えることができた最後はそう言ってくれれば、

みんなこれを試してください。「こんなにいいものだったんだってね。死ぬって言うことは」って言うんです。「幸せです」って親族が亡くなったときに言ってくれるんですよ！

これはもったいない。広めなきゃいけない。だから、無償でやっている。ただ、全国だとちよつと無力感を感じるんですよ。でも群馬だったらできる。無償なので声も掛かりやすい。広がるという手応えも出てきています。

(副) 「死んだときに幸せです。」とはすばらしいですね！このような苦に対する精神的なサポートは本来、私たち僧侶が行わなければならないと思うのですが？

(萬田) 既成宗教が今やっていることのひとつが、「亡くなったあとにケア」で、生前のケアが非常に少ない。逆にキリスト教の牧師さんや新興宗教

のみなさんは、「亡くなる前」に関与してくれる。自宅での看取りチームの中に牧師さんも入っていることはしょっちゅうあります。

今日も言われました、「今日の講演はお坊さんの役割じゃないですか？お坊さんがこういう話ししてくれるといいんですがねえ〜」

キリスト教信者の2人に1人には牧師さんが来ています。生前から顔を会わせています。普通はヘルパー、看護師、医師、家族。僕で患者をサポートしますが、もう1人強力な助っ人が入る訳ですよ。「恐ろしくありませんよ。大丈夫ですよ。」って声掛けてくれるんで、僕の仕事がないんです。それが本来のべき状態ですよ。

(副) 私もハワイで開教師を7年半していたとき、信者さんの入院している介護施設や、病院を定期的に訪問していました。とてもいいものです。日本では忙しくてなかなかできていませんが、「お坊さんはまだ、早いですよ」という雰囲気はある。もつと、やらなきゃいけないですね。

(萬田) 実は僕らもそうなんです。まだ、「緩和ケア」の一番じゃない。まだ早いと言われる。それは同じです。

時代は早期から「緩和ケア」と言っているけれど、医者も家族も「まだ、そんな状態じゃない」と言っていますよね。僕らが入っていきたくても当事者が拒否する場合もある。

ただ、キリスト教や新興宗教は普通に入っていますよ。常に信者さんの生活に入っているからじゃないかな？

だから、広まっていけないからいけないので、「緩和ケア」紹介が僕らに入っていないのは、僕らの努力と実力が足りないからだと思います。

人々が、「あそこに頼めばいいんだ」と広まってくれば、今は次第にそうやってきましたけれども、実力で4年半やってきたけど、次第に紹介が入ってきている。結果を出しているんです。

僕らの実力が足りないんじゃないかと、「病院から来て下さい。」「患者さんから来て下さい。」と言われるようになって、

多分、仏教界全体の実力も努力もが足りないんじゃないですかね？キリスト教はすでに入っているわけですから。生活の中に。

以前は自宅で看取ってきたわけですが、40〜50年前から看取りが病院の仕事病院になってきた。たぶん、仏教も生活の中に入っていましたよ。それが、次第に医療が進んで最後のお葬式だけになってきている。

僕は、それを元に戻そうと思ってやっていますけれども、仏教は頑張っていないのかも知れません。もつと、信者さんの生活の中に入っていない

うがいかも知れませぬね。

震災が1つのきっかけになったと思うんですよ。ある意味「いいチャンス」なんじゃないかなと。皆のところが変わってきている。「人は死なない」という状態から「ある日突然死んじやう人もいるんだ」と少し変わってきていますよ。明らかに。

(副) 震災後は、結婚率が上昇して、離婚率が減少したとも聞いています。

(萬田) 僕は手応えで「死」に対する

患者さんの権利

当院では、患者さんと医療従事者との間に信頼関係を築き、より良い医療を受けて頂くために、次の事を宣言し基本姿勢にいたします。

一、(個人の尊厳) 患者さんは病を自ら克服する主体としてその生命、身体、人格を尊重されます。

二、(平等な医療) 患者さんは、人種、年齢、性別、地位等に関わらず平等な医療が受けられます。

三、(最善の医療) 患者さんは、最善の医療を受けることができます。患者さんは病院や医師を選ぶことができます。また、適切な病院や医師を紹介してもらうことができます。

四、(知る権利) 患者さんは、投薬、検査、手術の目的、方法、内容、危険性や症状について、十分納得できるまで説明を受けることができます。

五、(自己決定) 患者さんは、診療内容について十分説明を受けたうえで、自己の意志に基づいて医療行為を選択し受けることができます。或いは断ることもできます。

六、(プライバシーの尊重) 患者さんのプライバシーは、十分尊重されます。

意識が変わったと思います。以前は公共の面前で「死の話をする」とタブーというところがありました。今は「死」という言葉をタイトルにして講演も平気でできるようになりました。

タブーじゃなくなってきた。僕らにとっては、とっても追い風が吹いている。同じように仏教にとってもチャンスですよ。

(副) 今回の震災でも多くの僧侶は被災地での葬儀や読経、炊き出しなどのボランティアに今でも参加しつづけています。

(萬田) 僕は、お坊さんは葬儀社に付随するものという意識がありました。

(副) 瑞岩寺では、「本堂で葬儀を」ということを提唱して勧めています。本堂を使用することで会館の使用料がいりませんし、お葬式全体の費用も半分以下に軽減できます。なによりも昔のように葬儀自体にもつと僧侶が関わるべきだと思えます。今は、萬田先生の言われるように「葬儀の一部」になってしまっている。

私は枕経のときに、葬儀の威儀や全体像、費用などを遺族に説明し、故人の生前の写

真を頂いて『想い出DVD』を制作して、お焼香のときに映像と音楽と共に流したり、遺族お子さんやお孫さんから『お別れの言葉』を読みあげてお別れをし葬儀全体をプロデュースし深く関わるようにしています。

葬儀社の葬儀はカタチを重視して葬儀の威儀は説かない。これは僧侶の大切な仕事です。葬儀は故人の一生をたつた2日に凝縮する大切な作業であって、100人いれば100通りの葬儀があるはずですよ。そこで、こころの区切りをつけないといけない。

葬儀社主体の葬儀をただ傍観する「観客型」ではなくて、遺された遺族全員が関わり作り上げる「参加型」がいいと思っています。自らが参加することによって、悲しみも大きいのです。終わってスッキリすることもあるのです。できれば、生前からもつとお寺に気軽に出入りして僧侶に相談して欲しいと思います。

うちは保育園も運営していますので、本当に『生まれてから墓場まで』をモットーにみなさんの生老病死の苦しみに寄り添いたいと願っております。辛いことがあったり、悩んだりしたら「あのお坊さんに相談してみよう」と思われる人になりたい。信仰は生活の中に入らないと意味がないですから。

(萬田) 私の患者でも、1〜2割の人が強い信仰を持っている。そのうちの

半分がキリスト教でもう半分が新興宗教という感じですよ。信仰をもっている人は「死」から逃げません。どこかで「死」を受け入れている。だから、辛さがありません。逃げなければ怖くないですね。これこそ、信仰のすばらしさだと思います。

緩和ケアのテクニクは死を受け入れるための時間稼ぎです。「死」を受け入れてくれれば、次の薬を増やさなくていい。どんなに延命治療ができて、逃げている間は苦しいですよ。

どこのお宅に伺っても神棚と仏壇があります。きつと、お参りはしているし、生活に入っていると思います。でも、「死」を受け入れられるかどうかはその人の信仰の強さによります。信じることで、「死を受け入れる」状態になっている人はまだまだ少ないですね。

(副) 仏教的には、お悟りを開いて解脱をするか。中有の間に輪廻転生するわけですけれども、お釈迦さまが悟られた「四法印」①「諸行無常」、②「諸法無我」、③「涅槃寂静」、④「一切皆苦」をきちんとつと布教していかないといけないですね。

萬田先生、今回はいろいろ勉強になりました。是非、これからの実践の参考にさせていただきますと思います。ありがとうございました。

合掌

瑞岩寺寺子屋ライブ

坂岡嘉代子さん講演会& 歯ぐるま太鼓『いのちの鼓動を響かせろ』

本年度、寺子屋ライブ 坂岡嘉代子さん講演会&歯ぐるま太鼓『いのちの鼓動を響かせろ』はひとりにはひとりの光がある』が終了した。

自立更正支援スクール『歯ぐるま』代表・坂岡嘉代子さんは、和太鼓を通じて、ろうあ者や非行、虐待、ひきこもりなどで心を閉ざす子どもたちを導く「お母ちゃん」。現在代表をつとめる福井県の『はぐるまの家』で非行からの立ち直りを目的とした子どもたちとの共同生活をされています。

「一人一人に光がある」「落ちこぼれなんて一人もない。」「自分の光を自分で見つけ、自分で光る」の心境で青少年育成に尽力され各地で講演活動などを行っている。



今回は、演題『一人にはひとりの光がある』と題して、ご講演をいただきました。

また、演奏した和太鼓『歯ぐるま』は、自立更正支援スクール『はぐるまの家』のメンバーで構成されているグループで、生活のカリキュラムのひとつとして、和太鼓の練習を取り入れ、規則正しい生活の中で、精神と肉体の鍛錬をすることにも、仲間のみんなと一緒に汗を流すこと、共同でなにかをつくりだすことを学びながら、個々それぞれの想いをバチに込め、日々練習に励んでいるそうです。88年にプロデ

ビュー後、芸術祭やチャリティコンサートなどで各地を公演。また、アメリカやドイツ、スイス、バングラーデッシュ、タイなどで海外公演もされている。そして、2003年には法務大臣賞を受賞された。すばらしいパフォーマンスだった。

幼児期に虐待を受けたり、親の愛情を精一杯受けることができずに、「歯ぐるま」が狂ってしまった子どもたち、親からアイロンを押し付けられたり暴力を振るわれたり、食事を与えられなかったり、生まれてすぐにも耐えられまい。まして、幼少期だったら、いわゆる「壊れてしまう」とは当然だろう。「壊れてしまった子どもたちは放火をしたり、暴力行為を振るうようになってしまふ。そんな将来を親は想像できないでいる。

そんな子どもたちと寝食を共にし、苦しみも喜びもともに共有し、すでに1000人近い子どもたちを世の中に送り出し続けておられる。「人の苦し



みを音よりも早く救い続ける」まるで「観音さま」のようだ。坂岡さんとお話ししていると優しい語り口の中に、厳しい眼が光る。今までのすさまじい体験がそうさせているに違いない。

演奏中もお寺に宿泊したときも、彼らの過去に想像もできないことがあったことは微塵も感じられないほどの皆好青年だった。イケメンでもあった。礼儀正しく、朝も6時起床。演奏中も足音ひとつ立てない。食事のあと片付けも、率先してやっていた。普通の高校生がここまでできるだろうか？

人は「多くの人から見守られている」と感じられることが大切だろう。自分はひとりじゃない。多くの人々との関係性の中で自分を認識し尊重でき相手も思いやることができよう。そうすれば自分の「いのち」を人生を無碍にしようとはしない。人間は上にも成長するが、下にも成長できる。その人間の幅が彼らのすばらしさになっていると確信した一夜だった。

(副)

住職日記

『映画—あなたへ』

高倉健主演映画『あなたへ』を観た。

主人公は亡くなった妻の遺骨を富山から長崎の平戸の海へ散骨するために一人旅をする。

その道中でさまざまな出会いを通じ、亡き妻との思い出に浸り、時には対話を試み、自分に問いかけつつその答えを見出し出ていくストーリーだ。(観ていない人はゴメンナサイ！)

実際、うちのお寺の場合、49日まで納骨する場合はほとんどだが、それは遺族の希望にもよる。散骨や樹木葬という選択肢も最近が増えてきている。

仏教的にはこの49日は、「中陰」または「中有」とい、解脱または生まれ変わりの期間とされているが、遺族のこのころのケアの時間にもなっている。

その期間に、亡き人を想い、心に刻み、癒しの時間を過ごすのだ。

人は本当に辛いとき悲しいときは、頑張りたくなかない。本当に何もしたくなくなる。

時には、自殺を考えてしまうこともあるだろう。それは、最愛の妻や子、肉親だったたりすればするほど辛いに違いない。



「大切な人を亡くして初めて、あの人の有り難さが分かります。私も葬儀でよく遺族に聞かされるフレーズだ。でも、実際

にその立場に立ってみたいとなかなか、その辛さは他人には分からない。他人のこのころの痛みなんて簡単に分かるものじゃない。

私は、「人間は上にも成長するが、下にも成長する」と思っている。

辛いときや悲しいときには、下に成長するのだ。だから、いつかそれが反動となって、いいこともその分やってくると思っている。

幸せを感じる力が通常の人以上に身につくから「感じる」力が高くなる。最終的に、辛くないから分かっていられないし分かっていく。

1日24時間、365日一緒にいても分かり合えない場合もあるし、たった1回逢っただけで分かり合える場合もある。時間の長さじゃなく、その人間の深さが決めるのかも知れない。

旅の中で主人公が、多くの人のご縁に触れ、出会い、飲み、語り、繋がりを、そして分かれていく。それは、まるで人生のようだ。

そして、深い悲しみから、行動を起こし、他人の情や種田山頭火の詩の一遍。自然の力によって主人公は勇気をもらい立ち上がっていく。

そういうえば、『運』という字は、人が行動し、神社やお寺にお参りするこ

とで上向き意味だそう。でも、「生きるってことは大変なこと！」でも、「生きるってことはすばらしい！」

亡き妻の手紙の内容は、自分で気づくしかない。

「日本人ってなかなかいいよ！」って映画です。オススメです！

瑞岩寺副住職

長谷川 俊道

お知らせ

◆「あんのん墓苑」

「樹木葬(木もれ陽)」完成

昨年度、墓地の不足と新しい墓地の形を考えて瑞岩寺墓地南側に『あんのん墓苑』が完成しました。この墓地の特徴は左記のとおりです。群馬県では瑞岩寺だけの仕様になります。

【一般墓地区画】

〈小区画〉

永代使用料30万円+基礎造成費10万円+墓地管理費2千円/年

合計40万2千円

〈中区画〉

永代使用料35万円+基礎造成費15万円+墓地管理費3千円/年

合計50万3千円

【Withペット墓地区画】

ペットと入れる墓地です。

永代使用料45万円+基礎造成費15万円+墓地管理費3千円/年

合計60万3千円

【永代供養墓地区画】

先祖供養の継承ができなくなった場合、瑞岩寺が続く限り責任をもって(永代)供養します。

●生前契約ができます。葬儀の方法や埋葬法に問題意識を持ち、自分の死後は自分で決定したいという方のための墓地です。

●墓地が遠隔地になるので整理したい、分家したのでお墓がない、墓地建設に莫大なお金をかけたくない、身寄りのないお骨を預っているなど。

●普通の墓地としても使用できる画期的な墓地です。

墓石料40万円+永代使用料30万円+永代管理費10万円=合計80万円

〈墓碑刻み別料金〉

◆墓参の際のお願い

墓参の際、墓前にお供えのお供物はカラスや犬猫などが食荒らし汚れます。佛様は香りとお気持ちのみ頂きますので、お参りが済みましたらお持帰り下さるようお願い申し上げます。お団子もできましたら下にアルミホイルを敷いていただくと掃除がしやすく衛生的です。また、古い塔婆はゴミ箱に捨ててはいけません。お寺でお炊き上げをしますので寺務所へお持ち下さい。

◆悩み事・困り事の相談

悩み事・困り事の相談は無料です。必ず電話(三七一一二二二)にて予約してお越し下さい。相談の内容が外部に漏洩することはありません。相談時間は午前9時から午後7時まで。夜間・深夜の相談は受けません。

◆厄年厄除、家内安全、商売繁昌、身体健康、学業成就、安産守護、家族祈願、自動車祈願

法要は、毎日十二時よりお参りできます。ご供養、ご祈願、ペット供養、水子供養は、電話、ファックス、電子メールなどでお願ひできます。

すべての人に佛さまの智慧と慈悲を

慈眼山 瑞岩寺

宗教学者

群馬県太田市矢田堀町388

TEL:0276-37-1231/FAX: 0276-37-5535

E-mail:info@zuiganji.com

Website:http://www.zuiganji.com

i-mode:http://www.zuiganji.com/i/

◆御意見、御要望はいつでもお知らせ下さい。

◆お身体をお大切に、お健やかにお暮らしく下さいませ。

◆み仏さまの御加護を心からお祈りいたします。 合掌